【展望】

創造性について

Creation in Enterprise

常務取締役（生産本部長）塚本順佑
Managing Director (Fabricating Division) *Jyunsuke TSUKAMOTO*

今年の初め，ある技術月刊紙に本田技研の本田宗一郎氏の記念講演記事があった。詳しい内容については忘れたが，およそ次のような内容であった。

「本田技研ではオートバイレース，自動車レースに出場し，ともに世界選手権を取るという，日本初の偉業をなし逐げたことがあるが，この時の入賞者には日本人は一人もおらなかった。自動車レースにはフオーミュラーIというレーシングカーを出場させたが，この車を造るのに当時2億円以上もかかり，現在造るとすれば30億円は下らないという代物であった。この車には外国人レーサーを乗せた。外国人を雇うと，その時代で2,000万円から3,000万円ぐらい，高い人なら4,000万円ぐらいかかった。レーシングカーに膨大な費用をかけたうえに，なぜそんなに高い外国人レーサーを雇ったかというと，彼らは，あそこが悪い，ここが悪い，形が悪い，踏みこんだ時立ちあがりが悪いとか，車体がスネークを起こすとか，いろんなことを指摘してくれるからである。単にレーサーでありながら，まことに創造性に逞しい。日本人では考えの及ばないことを平気で指摘してくれる。日本人のレーサーは安い報酬で乗ってくれるが，そういう技術的なことは一つも指摘，要求してこない。

単にレースそのものであれば，訓練を重ねれば当然，日本人レーサーが外国人レーサーに追いつくのは目に見えている。しかしメーカーが求めるのはレーサーの技能もさることながら，技術の開発向上である。したがってトータル的に考えると，高い外国人レーサーを雇った方が得策である。このようなことは自動車レース以外にたくさんあるのではなかろうか。」

以上のような記事であったが，日本人の創造性の乏しさと，習熟性の高さを訴えられておられることを感じた。

さて，現在までの日本経済の進歩には賞賛に値するものがある。しかし，その大部分は先進国の模倣に近いものであり，日本自身の独創によるものは，ごく僅かであったと言えるのではなかろうか。先進国の経験や努力の結果をすばやく取入れ，そして趣向を加え，日本人の技能の高さと正確さによって自分のものにすることは，先駆者に追いつく方法としては最も容易であり，早く，しかも安価である。日本は国をあげてこの方向に努力し，大成功をおさめたのが実情だと思う。

しかし世界経済に著しい変化が起こり，また資源においても大きな波をかぶることになった日本が，従来どうりのこの安価な方法を取り続けていくことで良いのか，大きな疑問となってきた。世界中の国々，先進国に及ばず中進国さえも次第に日本の競争者となってきている。このような情勢を勘案していくと，知恵や知識を外国から単に導入するという方法は，もはや困難となってきていると判断される。そこで当然考えなければならないのは「脱模倣」であろう。すなわち，自分で考え，創造し，自分の真の力で外国と競走していく，新しい日本への変身が必要である。創造とは人間だけに与えられた能力でもある。

我々の生きている高度に発達した現代社会は，いうまでもなく，現在生きている人々一代でできあがったものではない。有名，無名をとわず，過去の実にさまざまな人々による創造性の累積によって成りたっている。このように考えると現代社会は，まさに創造性の集まりであり，今後どのような社会を実現するかは現在の人々の創造性にかかっているのではなかろうか。もし，我々が創造性を失ったら，現代社会は短期間のうちに行き詰まってしまうに違いない。現代社会はテンポが激しい。その激しい変化の中で人類がより以上に繁栄していくためには，社会とか企業とかを構成する人々が，大いに創造性を発揮していかなければならないのではないかと考える。

単に創造性の開発といっても，ある日突然ふってわいたように新発明があったり，新アイデアが飛びだすといったことは稀である。また急に創造性の開発という大号令をかけたところで，すぐその効果を期待できるものでもない。創造性開発の手順とかノウハウとかいったものがあるわけでもない。それよりも逆に創造性にブレーキをかけるような現象が現代社会に多くなってきているのではなかろうか。技術の発達による機械化，オートメ化による作業の単能化，高度な機器等の開発により逆に機械に使われる立場の人が出てきている。それに規格化，標準化といった制度的なものもあるが，何よりもあらゆる面で，教育方法が一番問題だと思う。枠にはまった教育が，枠から出ないような人間を作りつつある。一般的

な例であるが，過日テレビでプロゴルファーによるレッスンを見た。受講者の一人が教えられている型以外の技法について質問したが，それには一切耳をかさず，自分の教えた通りの型をマスターすること，自分の教えた型をはみださないことを繰り返していた。たしかに長い経験と工夫，研究を重ねた合理的な技法であるから，その通り訓練すれば上達は早いであろうが，一方，それには限界があるのではなかろうか。ある型にはまったということが逆に弊害となって，それ以上の進歩を阻害するといったことも考えられよう。受講者に選択させたり，研究させたりする教え方はないものであろうかと，その時，強く思った。教育とはある洗練された型を教えこませるだけとするならば，教育は人々の創造性を止めようとする傾向にあるのではなかろうか（もちろん体で覚えるスポーツ等は繰り返し訓練を重ねることが第一であることは承知している)。

しかし，教育法が悪いからといって現状に甘んじているわけにはいかない。我々は現在それぞれが担当している業務に対して，もっと効率の良い方法がないか，もっとコストを引き下げる方法はないか，１人１人の能力と責任に応じて創造性を発揮し，企業体質を強固にしていかなければならない。そしていつの日か翳りあることを予期せねばならない主生産品について，次を担う事業，新製品の開発，新しい技術など，企業内の創造性発揮を大いに高める運動を展開していかなければならない。

先に創造性とは人間のみに与えられた能力と書いたが，全ての人間には創造性はある，競争心もある，固定観念を打破したいと思う気持もある。そうした潜在能力をいかに引き出すか，そうしたムードをいかに作り出すか，それをいかにシステム化していくか，真剣に取り組める環境作り，具体化，研究すべき部門の強化等，大いに指導性を発揮する責任を，私自身深く感じている今日この頃である。

企業の中で働く人々の創造性を尊重し，働く人々が生きがいを感じられる職場にし，働く人々すべてにすばらしい人生をつかむチャンスを与えることは，その人に大きな恩恵を与えるとともに，企業の発展にも繋がるのである。企業が創造性発揮を尊び，それを生かして社会に貢献し，企業自身が発展するということはまことにすばらしいことと思う。

〔追記〕

ある人の本に次の文章がある。

「あの人には人間的魅力があるとよくいう。この人間的魅力とはなんだろう。いろいろの面が考えられるが，最も大きな要素はその人が他の人に与える快い驚きではないだろうか。

いつ会っても同じだとか，あるいはこちらがなんとなくこういう人だと予想していたとうりの人だとすると，それほど人間的魅力を感じない。会うたびごとにどこか惹かれる，予期したこともない何かをその人から受ける，こういうときに人間的魅力を感じるのである。

こう考えてみると，人間的魅力とは創造性ではないだろうか。もちろん，創造的な人がすべて人間的魅力をあわせもっているとは簡単にいえないが，少なくとも，創造性のない人に魅力があるとは思えない。会うたびに，何か惹かれるところがあるというのは，その人が創造的であり，たえず何かを求め，進歩していて，それがこちらの心に響くからである。」